支那米の袋

夢野久作

ああ……すっかり酔っちゃったわ。……でも、もう一杯カニャックを飲ましてちょうだいね……。

あんたもお飲みなさいよ。今夜は特別だからサア……ええ。妾(わたし)の気持ちが特別なのよ。今夜は……。

……そのわけは今話すわよ。話すから一パイお飲みなさいったら……それあトテモ恐ろしい話なのよ。……ダメダメ。いくらあんたが日本の軍人だって、妾の話をおしまいまで聞いたら屹度(きっと)ビックリして逃げ出すにきまっているわよ。

……ああ美味(おい)しい。妾もう一パイ飲むわ。へべれけになるわよ今夜は……ニチエウオ！……レストラン・

オブラーコのワーニャさんを知らないか……ってね。管(くだ)を巻くわよ今夜は……オホホホホホ。……でも、あんたはその話を聞く前に、妾にいくらでもお酒を飲ましていい理由(わけ)があるのよ。何故って妾はこの間から何度も何度もあんたを殺したくなった事があるんですもの……マア。あんな顔をして……ホホホホホホ。まあそんなに怖い顔をしないでもいいから一杯お飲みなさいったら、シャンパンを抜いたからサ……。

……アラ……何故いけないの。おかしな人ねあんたは……まあ憎らしい。妾、そんな薄情物じゃないわよ。あんたを殺してお金を奪(と)ったって、いくらも持ってや

しないじゃないの。亜米利加(アメリカ)の水兵の十分の一も持っていないこと妾チャンと知っているわよ。ホラ御覧なさい。ホホホホホ。だからそんな余計な心配をしないで一パイお飲みなさいったら……飲まなけああんたを殺したいわけを話さないからいい……寝てる間(ま)に黙って殺しちゃうから……さあ……グッと……そうよ。サアも一つ……これは妾を侮辱した罰よ。ホホホホホホ。

今夜もそうなのよ。チョット電燈(でんき)を消すから、その窓から向家(むこう)の屋根を覗(のぞ)いて御覧なさい……ホラ、あんなに雪が斑(まだら)になって凍り付いているでしょ。妾はあ

の屋根の雪の斑を見るたんびにあんたを殺したくてたまらなくなるのよ。……だからそのたんびにお酒を飲むの。ウオツカでも、ウイノーでも、ピーヴォでも何でもいいの。そうすると忘れちゃってね。あんたを殺すのを忘れちゃって寝てしまうから……ああ美味(おい)しい。妾もう一杯飲むわ。

……イイエ真剣なの。ホントウに真剣なのよ。そうして今夜こそイヨイヨ本気になってあんたを殺そうと思っているのよ。だから今夜は特別なのよ……だってあんたはちょうどこんな晩に、妾(わたし)を生命(いのち)がけの旅行に連れ出して行った男にソックリなんですもの……背(せ)

の高さと色が違うだけで、真正面（まとも）から見ているとホントに兄弟かと思う位よ。だからコンナに惚れちゃったのよ。……イイエ……ちっともトンチンカンな話じゃないの。妾、そんなに酔ってやしないわよ。カニャックなんかイクラ飲んだって管なんか巻きやしないから……その訳はこうなのよ。まあお聞きなさいったら……トンチンカンでもいいからサア……。

　あんたはツイこの頃来たんだから知らないでしょうけども、この間、此浦塩（ここ）を引き上げて行った亜米利加（アメリカ）の軍艦ね。あの軍艦（ふね）の司令官の息子でヤングっていうのが、その男なのよ。……ええ……司令官と同じにヤ

ングっていってね。名前だか苗字だかわからないけど、只そういっていたの……そうネエ。年は三十だって云っていたけど、あんたと同じ位に若く見えたわ。六尺位の背丈けの巨男でね。まじめな、澄まアした顔をしていたわ。あの軍艦の中でも一等のお金持ちで、一番の学者だって、取り巻きの士官や水兵さん達がそう云っていたから本当でしょうよ。もっとも学者だっていうけど、あんたと違って歌も知っているし、音楽も出来るし、お酒はいくら飲んでも平気だし、ダンスでも賭博でも、あんたよりズット巧かったわ……それからもう一つ……お話がトテモ上手だったの。イイエ。

そんな六箇敷(むずかし)い話じゃないの。それあステキに面白い……トテモ恐ろしい恋愛の話よ。ヤングはその方の学者だって、自分でそう云っていた位だわ。

……ええ……そのヤングは軍艦が浦塩(うらじお)に着くと間もなく、このオブラーコの舞踏場へ遣(や)って来て、一番最初に妾を捉(つか)まえて踊り出したの。そうしたら妾の身体(からだ)が、ヤングの半分位しかなかったもんだから、一緒に来た士官や水兵さん達が、みんなでワイワイ冷やかして、ピューピュー口笛を吹いたりしたの。……そうしたらヤングも一緒になって笑いながら、妾をお人形さんのように抱き上げて、この室(へや)へ逃げ込んだと思うと、

妾の内ポケットから鍵を取り上げて扉（ドア）をピッタリと掛けてしまったの。……その素早かった事……でもその時は、妾が店に突き出されてから、まだやっと二日目位だったし、男ってどんなものか知らない位だったもんだから、ホントウにビックリしてしまって、一生懸命ヤングの軍服の胸に獅嚙（しが）み付いていたわ。だけどヤングは、この室（へや）で二人切りになると、トテモ親切に妾を慰めてくれたのよ。落魄（おちぶれ）男爵の娘から、こんなレストランの踊り子にかわった妾の身の上話を、シンカラ同情して聞いてくれたり、お料理やお菓子を色々取ったり、お酒をいくらでも飲んでくれたり、お金を持っ

ているだけ、みんな置いて行ってくれたりしたので、妾ホントウに嬉しかったわ。それはみんな亜米利加（アメリカ）の貨幣（おかね）だったけど、主人は大ニコニコで私の頭を撫で、

「大手柄大手柄……あのお客人を一生懸命で大切（だいじ）にしろ……」

って云ってくれたわ。

それからヤングは毎晩のように妾の処へ遣って来たの。そうして妾とだんだん仲よしになって来ると、いろんな事を妾に教え初めたの。亜米利加の言葉だの、ＡＢＣの読み方だの、キッスの送り方だの……誕生石の話だの……花言葉だの……だけど、その中でも一等

面白くて怖かったのは、やっぱり、そのステキな恋愛のお話だったわ。妾ホントに感心しちゃったのよ。ヤングが何でもよく知っているのに……。

それは亜米利加のお金持ち仲間で流行る男と女の遊び方で、お金持ちになれればなる程、そんな遊びの方法が乱暴なんですってさあ。……ええ……それはトテモ贅沢な室の仕掛けや、高価いお薬や、お金のかかる器械や、お化粧の道具なぞが、いくらでも要るので、貧乏人にはトテモ出来ない遊びなんですってさあ。そうして亜米利加の若い男や女は、そんな遊びがしたいばっかりに、一生懸命になって働らいて、お金を貯め

ているんですってさあ。

　その遊び方法(かた)っていったら、それあ沢山あるわよ。みんなお話しするのは大変だけど、一寸(ちょっと)云って見ればね……紅(べに)で作ったチューインガムや薬みたようなものを使って、相手を血まみれの姿にし合いながらダンスをしたり……天井も、床も、壁も、窓掛けも、何もかも緋色(ひいろ)ずくめにした部屋の中に大きな蠟燭(ろうそく)をたった一本灯(とも)して、そのまわりを、身体(からだ)中にお化粧して、その上から香油(においあぶら)をベトベトに塗った素(す)っ裸体(ぱだか)の男と女とが、髪毛(かみのけ)を振り乱したまま踊りめぐったりするんですとさあ。そうするとその蠟燭の光りの赤い色が、壁や、

天井の色に吸い取られて、まるで燐火（おにび）のように生白く見えて来るにつれて、踊っている人達の身体の色がちょうど、地獄に堕ちた亡者（もうじゃ）を見るように、赤や、緑色や、紫色に光って見えて来るんですって。それと一緒に身体じゅうの皮膚がポッポと火熱（ほて）り出して、燃え上るような気持ちになって来るもんだから、その苦し紛れに相手をシッカリと摑まえようとすると……ホラ、油でヌラヌラしていてチットモ力が這入（はい）らないでしょう。そのうちに、死ぬ程苦しくなって、ヘトヘトに疲れて倒れてしまうんですってさあ……ねえ。ずいぶんステキじゃないの。……だけどまだ恐ろしい話がある

のよ。

……エ……もう解ったっていうの……。嘘ばっかり……わかるもんですか。ズットおしまいまで聞いてしまわなくちゃ、解りやしないわよ。妾があんたを殺したがっている訳は……まあ黙って聞いていてらっしゃいったら……上等の葉巻を一本上げるから……。

そうしてね……そんな恐ろしい楽しみを続けて行くとそのうちには、とうとう、どんなに滅茶苦茶な遊びをしても直（じ）きに飽きるようになってしまうんですって。そうして最後（おしまい）には自分が可愛いと思っている相手を、自分の手にかけて嬲（なぶ）り殺しか何かにして終（しま）わなくちゃ、

気が済まないようになるんですってさあ。……つまり自分の相手をまだ可愛がり飽きないうちに殺しては又、新しい相手を探し探しして行くのが、亜米利加（アメリカ）で流行（はや）る一番贅沢な遊びなんですってさあ……ホホホホホ。ビックリしたでしょう。ねえあんた。誰だってそんな話ホントにしやしないわねえ。妾もそん時には嘘だって笑い出した位よ。だってそれあ男だったらそんな事が出来るかも知れないけど、女がそんな乱暴な遊びをしようなんて思えやしないわ。ねえ。何ぼ何でも……。

だけど、妾それから温柔（おとな）しくしてヤングの話を聞いていたら、それがだんだん本当らしくなって来たから

不思議なのよ。　亜米利加の女ってものはそんな遊びにかけちゃ男よりもズット気が強いんですってさあ。　亜米利加の男や女に独身生活者(ひとりもの)が多いのは、　そんな遊びのステキな気持ちよさを知っているからで、　そんな人達に、方々から誘拐(かどわか)して来た、美しい男や女を当てがって、　いろんなステキな遊びをさせる倶楽部(くらぶ)だの、　ホテルだのいうものが、　大きな街に行くとキットどこかに在るんですってさあ……つまりお金さえあれば、　ドンナ事でも出来るのが亜米利加の風(ふう)だっていうのよ。　だから恋愛の天国っていえば、　今の世界中で亜米利加よりほかに無いってヤングは自慢していたわ。

……でもね……その中でたった一つ、ドンナお金持ちでも滅多に出来ない、一番ステキな、一番贅沢な、取っときの遊びがあるっていうのよ。ねえ……面白いでしょう……それはねえ。今云ったようにお金ずくで出来るいろんな素敵な遊びにも飽きてしまって、どうにもこうにも仕様（しよう）がなくなった人の中の一人か二人かがやって見たくなるステキなステキな、この上もない無鉄砲な遊びで、それこそホントにお金ずくでは出来ない生命（いのち）がけの愉快な遊びなんですってさあ……そう云ったらあんたはわかるでしょう。その遊び方が……え……わからないって……まあ。……

……だってその遊びの本家本元は日本だってヤングはそう云ったのよ。世界中のどこにも無くて日本にだけ昔から流行（はや）っているのを、この頃亜米利加の学者たちが大騒ぎをして研究を始めているので、トテモ有名な遊びなんですとさあ……そう云ってもわからない？……まあ……じゃもっと云って見ましょうか。

ヤングはそう云ったのよ。日本の芸術ってものは何でもかんでも世界中の芸術の一番いいとこばかりを一粒選（え）りにして集めたものなんですってさあ……イイエ、オベッカじゃないのよ。ヤングがそう云っていたんだから……妾なんかは解らないけど……だから日本では

恋愛の遊びだって、ほかの色んな遊びの仕方は、もうすっかり流行(はや)り廃(すた)っている代りに、その一番ステキなのがタッタ一つだけ、今でも残っているんですって。一つは日本人はお金をそんなに持たないから、ほかのお金のかかるのはみんな諦らめてしまって、その一番ステキなのだけで満足しているのかも知れないって云うのよ。それをこの頃になって亜米利加の学者たちが八釜(やかま)しくいって研究しているけども、それはただ学問の研究だけで、本当にやって見ようなんていう度胸のある人間は、まだ一人も亜米利加に出て来ないんですってさあ……そんなステキな遊びが日本に在るのを

あんた知らない……マア……そんな筈はないわ。ヤングは学者だから嘘なんか吐きやしないわよ。あんたは知っているけど気が付かないでいるのよ。日本ではそんなに珍らしくないから……。

……エ？……その遊びの名前ですって……それを妾スッカリ忘れちゃったのよ。イイエ本当よ……今に思い出すかも知れないけど……おぼえているのはその遊びの仕方だけよ。それあトテモ素敵な気持ちのいい遊び方で、聞いただけでも胸がドキドキする位よ。何でも亜米利加の言葉で云うと「恋愛遊びの行き詰まり」っていったような意味だったわよ。日本の言葉で云うと、

もっと短かい名前だったようだけど……え？……その遊びの仕方を云ってみろって？……厭々(いやいや)。……それは妾わざっと話さないでおくわ。あんたが思い出さなければ丁度いいからね。おしまいの楽しみに取っとくわよ。……ええ……今夜は妾はトテモ意地悪よ。ホホホホホホ。

……でも、そんな話を初めて聞いた時には、妾(わたし)もうビックリしちゃって髪毛(かみのけ)をシッカリと摑みながらブルブル慄(ふる)えて聞いていたようよ。その頃の妾は今よりもズッと初心(うぶ)だったもんですからね……そんな話を平気

でしいしい、青い顔をしてお酒を飲んでいるヤングの軍服姿が、だんだん恐ろしいものに見えて来て、今にも妾を殺すのじゃないか知らんと思い思い、その高い薄っペラな鼻や、その両脇に凹(くぼ)んでいる空色の眼や、綺麗に真中(まんなか)から分けた栗色の髪毛(かみ)を見つめていたようよ。何だか悪魔と話しているような気がしてね……。

　だけど、そのうちにヤングから、そんな遊びの仕方を、一番やさしいのから先にして一つ一つに教(おそ)わって行くうちに、妾はもう怖くも何ともなくなってしまったのよ。……え……それあ本当の事はどうせ亜米利加(アメリカ)の本場に行って、色んな薬や器械を使わなくちゃ出来

ないのが多かったし、一番ステキな日本式の遊びや、そのほかの生命がけの遊びは相手が無いから、只真似方と話だけですましたの。妾の身体に傷が残るようなのも店の主人に見つかると大変だから、ヤングと一緒に亜米利加に行って結婚式を挙げてからの楽しみに取っといたけど、ほかのは大抵卒業しちゃったのよ。……それも初めのうちは、妾がヤングからいじめられる役で、首をもうすこしで死ぬとこまで絞められたり、縛って宙釣りにされたり、髪毛だけで吊るされたりして、とても我慢出来ない位、苦しかったり痛かったりしたのよ。だけどそのうちにだんだん慣れて来たら、

その痛いのや苦しいのが眼のまわるほどよくなって来てね……妾があんまり嬉しそうにして涙をポロポロ流したりするもんだから、おしまいにはヤングの方が羨ましがって、いつも持っている小さな鞭を妾に持たして、それで自分の背中を思い切り打ってくれって云い出した位よ。

ええ……妾思い切り打ってやったわ。ヤングなら背中に鞭の痕が付いていても誰も気付かないでしょうし、妾も自分でいじめられる気持ちよさを知っていたんですからね……イイエ、音なんかいくら聞こえたって大丈夫よ。妾ヤングから教わった通りに呑気そうに

流行歌(はやりうた)を唄いながら、その調子に合わせて打(ぶ)っていたから、外から聞いたって何かほかのものをたたいているとしか思えなかった筈よ。……でも、そうして寝台の上に長くなっているヤングの脂切(あぶらぎ)った大きな背中を、小さな革(かわ)の鞭で、力一パイにたたいている間の気持ちのよかったこと……打てば打つほどヤングが可愛いくなって来てね……そうしてもう、ヤングと一緒に亜米利加(アメリカ)へ行ったら、そんな遊びが本式に大ピラで出来ると思うと、楽しみで楽しみでたまらなくなっちゃったの。だから……妾は毎晩そんな遊びをする時間をすこしずつ裂(さ)いて、ヤングを先生にして一生懸命

に亜米利加の言葉を勉強し続けたのよ。

妾は言葉を覚えるのが名人なんですってさあ。ヤングがビックリしていた位よ。ヤングとこんな話が出来るようになる迄でには一と月とかからなかったし、水兵さん達と悪態のつきっこをする位の事なら、初めっから訳なかったわ。おしまいにはヤングがよくポケットに入れて持って来る英字新聞（アングリウスクユガゼド）が、すこうしずつ読めるようになったから豪（えら）いでしょう。自分の国の字だと聖書もロクに読めないのによ。ホホホホホホホ。だって妾の両親はトテモ貧乏で、妾を学校に遣（や）る事が出来なかったんですもの……お化粧の道具なんかも、

両親から買ってもらった事は一度も無かったのよ。だけどこの時ばかりは学者の奥さんになるのだからと思って、ずっと前から欲しくてたまらなかった型の小さい、上品なのを別に買って、バスケットの底に仕舞(しま)っておいたわ。ええ。それあ嬉しかったわよ。だってどうせ両親に売り飛ばされて、こんな酒場(レストラン)の踊り子になっている身の上ですもの……おまけに生れて初めて妾を可愛がってくれて、色んな楽しみを教えてくれたのが、そのヤングなんですもの……その頃の妾は今みたいな、オシャベリの女じゃなかってよ。どんな男を見ても怖ろしくて気味がわるくて、思うように口も利

けない中に、たった一人そのヤングだけが怖くなかったんですもの……アラ……御免なさいね。泪(なみだ)なんか出して……妾……男の方の前で、こんな事を云って泣くのは今夜が初めてよ。ネ……笑わないでね。

そうしたら……そうしたらね、ちょうどあと月(げつ)だから十月の末の事よ。ヤングがいつになく悄気(しょげ)た顔をして這入(はい)って来て、この室(へや)で妾と差し向いになると、何杯も何杯もお酒を飲んだあげくにショボショボした眼付きをしながら、こんな事を云い出したの……。

「可愛い可愛いワーニャさん。私はいよいよあなたと

お別れしなければならぬ時が来ました。あなたを亜米利加へ連れて行く事も思い切らなければならぬ時が来ました。私は明日(あす)の朝早く、船と一緒に浦塩(うらじお)を引き上げて布哇(ハワイ)の方へ行かなければなりませぬ。そうして日本と戦争を始めなければなりませぬ。そうなったら私は戦死をするかも知れないし、あなたを連れて行く訳にも行かなくなりました。昨夜不意打ちに本国からの秘密の命令が来たので、どうする事も出来ないのです。……しかしもしも戦争が済むまで私が死なないでいたらキット貴女(あなた)を連れに来ます。ですから何卒(どうぞ)今度ばかりは諦めて下さい」

……って……そう云っているうちに、ポケットからお金をドッサリ詰めた革袋を出して、妾の手に握らせたの。

妾、その革袋を床の上にたたき付けて泣いちゃったわ。

「そんな事は嘘だ」

って云ってね。それあ日本が亜米利加と戦争を初めそうだっていう事は、ズット前から聞いているにはいたけれども、ヤングの話はあんまりダシヌケ過ぎて、どうしても本当とは思えなかったんですもの。だから、「あんたは妾を捨てて行こうとするのだ。何でもいい

から妾はあんたを離れない。一緒に軍艦に乗って行く」

……って云って死ぬ程泣いて泣いて泣いて泣いて何と云っても聴かなかったの。しまいには首ッ玉に獅噛(しが)み付いて、片手で軍服のポケットをシッカリ摑んで離さなかったの……。

ヤングは本当に困っていたようよ。軍服の肩の処に顔を当ててヒイヒイ泣きじゃくっている妾を膝の上に抱き上げたまま、暫らアくジッとしていたようよ。けれどもそのうちにフイッと何か思出(おもいだ)したように私の顔を押し離すと、私の眼をキット睨(にら)まえながら、今まで

と丸で違った低い声で、

「ワーニャさん。いい事がある」

って云ったの。私はその時、何だかわからないまま
ドキンとして泣き止みながらヤングの顔を見上げたら、
ヤングは青白――イ、気味の悪い顔になって、私の眼
をジ――イと覗き込みながらソロソロと口を利き出し
たのよ。前とおんなじ低い声でね……。

「ワーニャさん。いい事がある。貴女がそれ程までに
私の事を思ってくれるのなら、一つ思い切った事を
遣っつけてくれませんか。私が今から海岸の倉庫へ
行って大きな麻の袋を取って来ますから、その中へ這

入ってくれませんか。毛布を身体に巻きつけておけば、人間だか荷物だかわからないし、寒くもないだろうと思いますから、そうして私の荷物に化けて軍艦に来て物置の中に転がっていてくれませんか。そうすれば、そのうちに私がうまく父親の司令官に話して、貴女を士官候補生の姿にして、私の化粧室に住まわせて上げますから……その話が出来るまで三度三度の喰べ物は、私が自分で持って行って上げます。随分窮屈で辛いでしょうけれども、暫くの間と思いますから辛棒してくれませんか」

……って……ネエあんたどう思って……トテモ、ス

テキな思い付きじゃないの……イイエ、ヤングは本気で、そう云っていたのよ。妾を欺（だま）していたんじゃないの。もうすこし先までお話するとわかるわ……ええ今話すわよ。話すからもう一杯飲んで頂戴……曹達（そうだ）を割って上げるからね……。

妾（わたし）、この話を聞くと手をタタイて喜んじゃったわ。だって今までに活動や何かで見たり聞いたりした「恋の冒険」の中（うち）のどれよりもズット素敵じゃないの。女の児（こ）が支那米（しなまい）の袋に這入って、軍艦に乗って戦争を見物に行くなんて……ねえ……妾あんまり嬉しかったも

んだから、思い切りヤングに飛び付いてやったわ。そうして無茶苦茶にキスしてやったわ。

ヤングも嬉しそうだったわよ。今までになく大きな声を出して歌を唄ったりしてね。そうして妾に、

「……それではドッサリお酒を飲みながら待っていて下さい。今夜は特別に寒いようだから、袋の中で風邪を引かないようにね。私はこれから袋を取りに行って来ますから」

って、そう云ううちに帽子を冠（かぶ）って外套を着て、どこかへ出て行ってしまったの。

妾、そんな時に一寸（ちょっと）心配しちゃったわ。ヤングがその

まんま逃げて行ったのじゃないかと思ってね……だけど、それは余計な心配だったのよ。ヤングは間もなくニコニコ笑いながら帰って来て妾の顔を見ると、
「……おお寒い寒い……一寸（ちょっと）、その呼鈴（ベル）を押して主人を呼んでくれませんか」
って云ったの。妾、ヤングの足があんまり早いのでビックリしちゃってね。
「まあ……今の間（ま）にもう海岸まで行って来たの……そうして袋はどこに持って来たの……」
って聞いたらヤングは唇に指を当てて青い眼をグルグルまわしながら妙な笑い方をしたの。

「シッ……黙っていらっしゃい……近所の支那人に頼んで外に隠しておいたのです。今にわかりますから……」

ってね……そう云ううちに主人が這入って来たら、ヤングはいつもの通りその晩妾を買い切りにして、お料理やお酒をドンドン運び込ませて、妾に思い切り詰め込ましたのよ。……途中でお腹が空(す)かないようにね……そうして主人にはドッサリチップを呉(く)れて、面喰(めんくら)ってピョコピョコしている禿頭(はげあたま)を扉(ドア)の外へ閉(し)め出すとピッタリと鍵をかけながら、

「明日(あす)の朝十時に起してくれエッ」

……て大きな声で怒鳴（どな）ったの。そうしておいて妾の手をシッカリと握ったヤングは、あの窓を指さしながらニヤニヤ笑い出したのよ……。

妾ヤングの怜悧（りこう）なのに感心しちゃったわ。あの窓はその時まで、もっと大きな二重硝子（ガラス）になっていて、その向うには、あんな鉄網（かなあみ）の代りに鉄の棒が五本ばかり並んでいたんだけど、その硝子（ガラス）窓を外（はず）して、鉄の棒のまん中へ寝台（ベッド）のシーツを輪にして引っかけて、その輪の中へ突込んだ椅子の脚を壁のふちへ引っかけながら、二人がかりでグイグイと引っぱると一本一本にみんな抜けちゃったの。……ええ……電燈を消していたんだ

から外から見たってわかりやしないわ。……その穴からヤングが先に脱け出して、あとから這い出した私を抱え卸してくれたの。

それは浦塩附近に初めて雪の降った晩で、あの屋根の白い斑雪もその時に積んだまんまなのよ。風は無かったようだけど星がギラギラしていてね……その横路地に白い舞踏服姿の妾が、寝台から取って来た白い毛布にくるまってガタガタに寒くなりながら立っていると、ヤングは大急ぎで、向家の横路地の間から、隠しておいた支那米の袋を持って来て妾の頭の上からスポリと冠せてくれたの。そうしてそのまんま地びたの

上にソッと寝かして、足の処をシッカリとハンカチで結(ゆわ)えるとヤットコサと荷(かつ)ぎ上げながら、低い声でこんな事を云って聞かせたのよ。

「さあ……ワーニャさんいいですか。暫くの間辛いでしょうけども辛棒して下さい。私がもう宜しいって云うまでは、決して口を利いたり声を立てたりしてはいけませんよ」

ってね……。だけど妾は、その袋があんまり小さくて窮屈なのでビックリしちゃったわ。妾の身体(からだ)は随分小さいんだけど、それでも足を出来るだけグッと縮めなければ袋の口が結ばらないのですもの。おまけにそ

の臭かったこと……停車場のはばかりみたいな臭いがしてね。ホコリ臭くて息が詰りそうで、何遍(なんべん)も何遍も咳(せき)が出そうになるのをジッと我慢しているのがホントに苦しかったわ。

　それからどこを通って行ったのか、よくわからないけど、何でもこのスウェツランスカヤから横路地伝いに公園の横へ出て、公使館の近くを抜けながら海岸通りへ出たようなの。途中で下腹や腰のところがヤングの肩で押えられて痛くてしようがなかったけど、やっとの思いで我慢していたわ。ええ。それあ怖かったわ。ヤングが時々立ち止まるたんびに誰か来たのじゃない

かと思ってね……。

海岸に来るとヤングは、そこに繋いであった小さい舟に乗り込んで、妾をソッと底の方へ寝かして、その上に跨（また）がって自分で櫂（かい）を動かし始めたようなの……そこいらは、まだ暗くて、波の音がタラリタラリとして、粗（あら）い袋の目から山の手の燈火（あかり）がチラリチラリと見えてね……妾は息が苦しいのも、背中が痛いのも、それから足を伸ばしたくてたまらないのも忘れて、時々聞える汽笛の音に耳を澄ましながら胸をドキドキさせていたわ。これが故郷のお別れと思ってね……そうかと思うと亜米利加（アメリカ）の町をヤングと連れ立って散歩している

自分の姿を考えたり……ヤングと妾の幸福のために、イーコン様にお祈りを捧げながら、ソッと小さな十字架を切ったりしていたわ。

そうすると間もなく、今までと丸で違った波の音が聞え出して、小舟が軍艦に横付けになったようなの。その時に妾は又ドキンとして荷物のつもりで小さくなっていると、こっちからまだ何も云わないのに、上の方から男の足音が二人ほど、待っていたようにゴトゴトと音を立てて降りて来たの。そうしてその中の一人が低い声で、

「ヘヘヘヘヘ。今までお楽しみで……」

って云いかけたら、ヤングが同じように低い声で、
「シッ。相手は通じるんだぞ……英語が」
って叱ったようよ。そうすると二人ともクツクツ笑いながら黙り込んで、妾の袋をドッコイショと小舟の中から抱え上げたの。

その時に妾はチョット変に思わないじゃなかったわ。何だか解らないけど、その二人の男の抱え方が、袋の中に生きた人間が居るって事をチャンと知っているとしか思えなかったんですもの。一人は妾の肩の処を……それから、もう一人は腰の処を痛くないようにソーッとネ……だけどこれは大方ヤングが今の間（ま）に手

真似か何かで打ち合わせたのかも知れないと思っているうちに、一度階段を降り切った二人の足音は又、別の段々を降り始めて、今度は波の音も何も聞えない、処々に電燈のついた急な階段を二ツばかり降りて行ったの。

その時にヤングは、もうどこかへ行っていたようよ。……いいえ船の中はシンとしていたけど、いつヤングが消えてしまったのか解らなかったわ……まあそう……出帆前ってそんなに忙がしいものなの……じゃ矢っ張りあんたの云うように、あの軍艦はずっと前から出発の準備をして命令が来るのを待っていたんだわ。ね

……そうでしょう……ヤングが出帆の日を知らなかったのは無理もないわ。そうして本当に日本と戦争をする気で出て行ったんだけど、途中で日本が怖くなったから止しちゃったんでしょう。……アラ……どうしてそんなに失笑（ふきだ）すの。

イイエ、あんたがいくら笑ったってそうに違いないわよ。だってヤングはおしまいまで一度も嘘を吐（つ）いた事なんぞ無かったんですもの。妾がヤングに欺されているように思うのはソレアあんたの嫉妬（やきもち）よ……まあいいから黙ってお酒を飲みながら聞いていらっしゃい。あんたの気もちはよくわかっているんだから。もっと

おしまいまで聞いて行くうちには、ヤングが云った事が本当か嘘かわかるから……ね……。

……そうしたらね……。

そうしたら、あとに残って妾を抱えている二人の足音が又一つ、急な段々を降りて行くと、どこか遠い処に黄色い電燈がたった一つ点(とも)っている、暗い、板張りらしい処に来たの。それと一緒に二人の男は、イキナリ妾を固い床の上にドシンと放り出したもんだから妾は思わず声を立てるところだったわ。だけど又それと一緒に、これはどこか近い処に人間が居るからで、妾を荷物と見せかけるために、わざとコンナ乱暴な真似

をしたのに違いないと気が付いたの。それでやっと我慢して、放り出されたなりにジッとしていたら、そのうちに誰も居なくなったのでしょう。二人の男は大きな声で話をしいしいユックリユックリと室（へや）を出て行ったの。

「アハハハハハ。もう大丈夫だ。泣こうが喚（わめ）こうが」

「ハハハハハハ。しかしヤングの智恵には驚いちゃったナ。露西亜（ロシア）の娘っ子なんて、コンナに正直なもんたあ思わなかったよ」

「ウーム。こんな素晴らしい思い付きは、彼奴（あいつ）の頭でなくちゃ出て来っこねえ。何しろ革命から後（のち）ってもの

あ、どこの店でも摺(す)れっ枯(か)らしを追い出して、いいとこのお嬢さんばかりを仕入れたっていうからな……そこを睨んだのがヤングの智恵よ」

「成る程ナア……ところでそのヤングはどこへ行きやがったんだろう」

「おやじん処(とこ)へ談判に行ったんだろう。生きたオモチャをチットばかし持込んでいいかってよ」

「……ウーム。しかしなア……おやじがうまくウンと云えあ良(い)いが……」

「それあ大丈夫よ。それ位の智恵なら俺だって持っている。つまり時間が来るまでは、他の話で釣っといて、

艦（ふね）の中を見まわらせねえようにしとくんだ。そうしてイヨイヨ動き出してから談判を始めせえすれあ、十が十までこっちのもんじゃねえか。……まさか引っ返す訳にも行くめえしさ」

「ウーム。ナアルホド。下手を間誤付（まごつ）けあ、良い恥晒（はじさら）しになるってえ訳だな」

「ウン……それにおやじだって万更（まんざら）じゃねえんだかんナ……ヤングはそこを睨んでいるんだよ」

「アハハハハ違（ちげ）えねえ。豪（えれ）えもんだなヤングって奴は……」

「アハハハハハハハ」

「イヒヒヒヒヒヒ」

……妾こんな話をきいているうちにハッキリと意味はわからないまま、もうスッカリ大丈夫なような気になって、グーグー睡ってしまったのよ。

ええ……それぁ大胆といえば大胆なようなもんよ。だけど、その時の妾はもう大胆にも何にも仕様（しよう）のない位ヘトヘトに疲れていたんですもの。最前からオブラーコで飲んだお酒の酔いと、今まで苦しいのを我慢していた疲労（つかれ）が一時（いちどき）に出ちゃって、いつ軍艦が出帆の笛を吹いたか知らないまんまに睡っていたわ。

だけど、そうして眼が醒めてからの苦しくて情な

かった事……軍艦の器械のゴットンゴットンという響きが身体（からだ）に伝わるたんびに、毛布ごしに床板に押しつけられている背中と、腰骨と、曲ったまんまの膝っ節（ぷし）とが、まるで火が付いたように痛むじゃないの。妾はもう……早くヤングが来てくれればいい。そうしたら水か何か一パイ飲ましてもらわなくちゃ、咽喉（のど）がかわいて死ぬかも知れない。そうしてモット大きな袋に入れてもらわなくちゃ……と、それぱっかり考えていたわ。そうして人にわからないように少しずつ寝がえりをしかけていると、不意に頭の上で誰かが口を利き出したので、妾は又ハッとして亀の子のように小さく

なってしまったの……それは何でも三四人の男の声で、妾のすぐ傍に突立って、先刻から何か話していたらしいの……。

「まだルスキー島はまわらねえかな」

「ナニもう外海よ」

「……ワン。ツー。スリー。フォーア……サアテン。フォテン……おやア……一つ足りねえぞこりゃア……フォテン。フィフテン。シックステン……と……あっ。足下に在りやがった。締めて十七か……ヤレヤレ……」

「……様と一緒なら天国までも……って連中ばかり

だ」

「惜しいもんだなあ……ホントニ……おやじせえウンと云えあ、布哇(ハワイ)へ着くまで散々(さんざっ)ぱら蹴たおせるのになア」

「馬鹿野郎。布哇(ハワイ)クンダリまで持って行けるか。万一見つかって世界中の新聞に出たらどうする」

「ナアニ。頭を切らして候補生の風(ふう)をさせとけあ大丈夫だって、ヤングがそう云ってたじゃねえか」

「駄目だよ。浦塩(うらじお)の一粒選(え)りを十七人も並べれあ、どんな盲目(めくら)だって看破(みやぶ)っちまわア」

「それにしても惜しいもんだナ。せめて比律賓(ヒリッピン)までで

も許してくれるとなア」

「ハハハハまだあんな事を云ってやがる。……そんなに惜しけあ、みんな袋ごと呉れてやるから手前（てめえ）一人で片づけろ。割り前は遣らねえから」

「ブルブル御免だ御免だ」

「ハハハ見やがれ……すけべえ野郎……」

そんな事を云い合っているうちに一人がマッチを擦（す）って葉巻に火を点（つ）けたようなの。間もなく美（い）い匂いがプンプンして来たから……。

だけど妾はそのにおいを嗅（か）ぐと一緒に頭の中がシイーンとしちゃったの。身体（からだ）が石みたように固くなっ

て息も吐けない位になっちゃったの。……だって妾みたようにしてこの軍艦に連れ込まれた者は、妾一人じゃないことが、その時にやっとわかりかけて来たんですもの……。妾のまわりにはまだ、いくつもいくつも支那米の袋が転がっているらしいんですもの……。おまけに、それをどうかしに来たらしい荒くれ男が三四人、平気で冗談を云い合いながら葉巻を吹かしているじゃないの……あんまり恐ろしい、不思議な事なので、妾は、あと先を考える事も何も出来やしなかったわ。ただ眼をまん丸に見開いて鼻っ先に被さっている袋の粗い目を凝視ながら、両方のお乳を痛いほど

ギュッと掴んでいたわ……夢じゃないかしらと思って……。

でも、それは夢じゃなかったの……そうして歯を喰い締めて、一心に耳を澄ましていると、ゴットンゴットンという器械の音の切れ目切れ目に、ドド——ンド——ンっていう浪（なみ）の音が、どこからか響いて来るじゃないの。……ええ……おおかた外（ほか）の女達（ひと）も妾とおんなじにビックリして小さくなっていたんでしょう。呼吸（いき）をする音も聞えない位シンとしていたようよ。

そうしたら又その中（うち）に、その葉巻を持っているらしい男が、一としきりスパスパと音を立てて吸い立てな

がら、こんな事を云い出したの。

「待て待て。片づける前に一ツ宣告をしてやろうじゃねえか。あんまり勿体（もってえ）ねえから」

「バカ……止せったら……一文にもならねえ事を……」

「インニャ。このまま片づけるのも芸のねえ話だかんナ……エヘン」

「止せったらヂック……そんな事をしたら化けて出るぞ」

「ハハハハ……化けて出たら抱いて寝てやらあ……何も話の種だ……エヘンエヘン」

「止せったら止せ……馬鹿だなあ貴様は……云ったってわかるもんか」

「まあいいから見てろって事よ……これぁ余興だかンナ……俺の云う事が通じるか通じないか……」

って云ううちに、そのヂックって男は、又一つ咳払いをしながらハッキリした露西亜(ロシア)語で演説みたいに喋舌(しゃべ)り出したの。

「エヘン……袋の中の別嬪(べっぴん)さんたち。よく耳の垢(あか)をほじくって聞いておくんなハイよ。いいかね。……お前さん達はみんな情人(いいひと)と一緒になりたさに、こんな姿に化けてここへ担(かつ)ぎ込まれて来たんだろう。又……お前

さん達の情人（いいひと）も、おんなじ料簡で、お前さん達をここまで連れて来たんで、決して悪気じゃなかったんだろうが、残念な事には、それが出来なくなっちゃったんだ。いいかい……だからね。……エヘン……だから怨むならばだ……いいかい……怨むならば、お前さん達の情人（いいひと）にこんなステキな智恵を授けた、ヤングという豪（えら）い人を怨まなくちゃいけないんだよ。……それからもう一人……この艦（ふね）に乗っている俺たちの司令官（たいしょう）を怨みたけあ怨むがいいってんだ。……イヤ……事によると、その司令官（たいしょう）だけを怨むのが本筋かも知れないがね……どっちにしても、お前さん達のいい人や、そんな

連中に頼まれた俺達を怨んじゃいけないよ。いいかい……という訳はこうなんだ。先刻(さっき)ヤングさんが司令官(たいしょう)に、お前さん達を亜米利加(アメリカ)まで連れてっていいかって伺いを立ててみたら、亜米利加の軍艦の中には、食料品(たべもの)より以外(ほか)に肉類(にく)を一切置いちゃイケナイってえ規則になっているんだッてさあ……だからね……折角(せっかく)ここまで来ているのをホントにお気の毒でしようがないけど、ちょうど風も追い手のようだから、お前さん達はその袋のまんま、海を泳いで浦塩(うらじお)の方へ……」

　ここまでその男が饒舌(しゃべ)って来たら、あとは聞えなくなっちゃったの。だって妾のまわりに転がっている十

いくつの袋の中から、千切(ちぎ)れるような金切声が一どきに飛び出して、ドタンバタンとノタ打ちまわる音がし始めたんですもの。中には聞いたような声がいくつもあったようだけど、そんな時に誰が誰だかわかりやしないわ。ただ耳が潰れるほどキーキーピーピー云うだけですもの。

　だけど私は黙っていたの。声を出すより先にどうかして、袋を破いてやろうと思って、一生懸命に藻掻(もが)いていたの。だけど袋が小さい上にトテモ丈夫に出来ているので、嚙み付こうにも嚙み付けないし、力一パイ足を踏ん張ると首の骨が折れそうになるし、その苦し

さったらなかったわ。だけど、それでも生命（いのち）がけの思いで、力のありったけ出して藻掻いているうちに、妾のまわりの叫び声が一ツ一ツに担ぎ上げられて、四ツか五ツ宛（ずつ）行列を立てながら階段を昇りはじめたの。その時にはチョットの間（ま）みんなの叫び声は止んだようだけど、その階段の音が聞えなくなると、又前よりも非道（ひど）い泣き声や金切声がゴチャゴチャに聞え始めたの。めいめいに男の名を呼んでヒイヒイ泣いていたようよ。

　だけど妾それでも泣かなかったの。そうして死に物狂いになって、両手で頭をシッカリと抱えながら、足の処の結び目を何度も何度も蹴ったり踏んだりしてい

たら、身体中が汗みどろになって、髪毛が顔中に粘り付いて、眼も口も開けられなくなってしまったの。その中に袋の中は湯気が一パイ詰まったように息苦しくなって来るし、髪の毛は顔から二の腕まで絡まって、動くたんびにチクチク抜けて行くし、おまけに着物と毛布が胸の上の処でゴチャゴチャになって、袋の中一パイにコダワリながら、お乳を上へ上へと押し上げるので、その苦しさったら……もう死ぬかもう死ぬかと思った位よ。そうしてそのうちに……御覧なさい。この臂の処が両方ともこんなに肉が出てピカピカ光っているでしょう。この臂はヤングが「猫の臂」って名を

つけて、紐育（ニューヨーク）婦人の臂くらべに出すって云っていたくらい柔らかくてスンナリしていたのが、知らないうちに擦（す）り破れてしまって、動くたんびにヒリヒリと痛み出して来たんですもの。……それに気が付くと妾はもう、スッカリ力が抜けてしまって、意地にも張りにも動けなくなったようよ……両方の臂を抱えてグッタリとなったまま、呼吸（いき）ばかりセイセイ切らしていたようよ。

そのうちに又、上の方から四五人の足音が聞えて来ると、みんなの叫び声がまた、ピッタリとなっちゃったの。それに連れて降りて来る男たちの話声がよく聞

えたのよ。器械の音とゴッチャになったまま……。
「アハハハハ。非道(ひで)え眼に会っちゃったナ。あとでいくらかヤングに増してもらえ」
「ギックの野郎が余計な宣告を饒舌(しゃべ)るもんだから見ろ……こんなに血が出て来た」
「ハハハハ恐ろしいもんだナ。袋の中から耳朶(みみたぼ)を喰い切るなんて……」
「喰い切ったんじゃやねえ。引き千切(ちぎ)りかけやがったんだ。だしぬけに……」
「俺あ小便を引っかけられた。コレ……」
「ウワ——。あれあスチューワードが持ち込んだ肥(ふと)っ

ちょの娘だろう。彼奴(あいつ)の鞭で結(ゆわ)えてあったから……」
「ウン。あのパン屋のソニーさんよ。おかげで高価(たけ)え銭(ぜに)を払ったルパシカが台なしだ。とても五弗(ドル)じゃ合わねえ」
「まあそうコボスなよ。女の小便なら縁起(えんぎ)が宜(い)いかも知れねえ」
「人をつけ……ウラハラだあ……」
「ワハハハハハ」
……だってさあ……こんな事を云い合って呑気(のんき)そうに笑いながら、その男たちは又四ツばかり叫び声を担ぎ上げたの。

「サア温柔(おとな)しく温柔しく。あばれると高い処から取り落しますよ。落ちたら眼の玉が飛び出しますよ」

「小便なんぞ引っかけないように願いますよだ。ハハハハハハ」

「ドッコイドッコイ……どうでえこの腹部(ポッポ)のヤワヤワふっくりとした事は……トテモ千金(せんきん)こてえられねえや」

「アイテッ。そこは耳朶(みみたぼ)じゃねえったら……アチチチ……コン畜生……」

「ハハハハ。そこへ脳天を打(ぶ)っ付けねえ。その方が早(はえ)えや」

「アイテテ……又やりやがったな……畜生ッ……こうだぞ……」

って云ううちに、……ギャーッて云う声が室中に

ビリビリする位響いて来たの。

その声を聞くと妾は又夢中になってしまって、身体中にありたけの力を出しながら、床の上を転がり始めたの。そうして出来るだけ電燈の光りの見えない方へ盲目探りに転がって行って、何かの陰を探して隠れよう隠れようとしていたの。そうすると今度は男たちの靴の音が離れ離れになって、一人か二人宛あとになったり先になったりしながら――次から次に担ぎ上げて

行くうちに、とうとう、室（へや）の中の叫び声が一ツも聞こえなくなってしまったのよ。ただ軍艦の動く響きと、微かな波の音ばっかり……人間の居るらしい音は全く無くなってしまってね……。

その時に妾はやっと、すこしばかり溜息をして気を落ちつけたようよ。妾の袋はキット何かの陰になって、見えなくなっているのに違いないと思い思い、顔中にまつわっている髪の毛を掻き除（の）けながら、なおも、ジッと耳を澄ましていたようよ。

そうすると、それから暫く経って、もうみんなどこかへ行って終（しま）ったと思う頃、今度はたった一人の、重

たい、釘だらけの靴の音が……ゴトーン、ゴトーンと階段を降りて来たの。そうして室（へや）のまん中に立ち止まって、そこいらをジーイと見まわしながら突立（つった）っているようなの。

……その時の怖かったこと……今までの怖さの何層倍だったか知れないわ……妾の寿命はキットあの時に十年位縮まったに違いないわよ。……もう思い切り小さくなって、いつまでもいつまでも息を殺していると、そこいら中があんまり静かなのと、気味がわるいのとで頭がキンキン痛み出して、胸がムカムカして吐きそうになって来たの。それを我慢しよう我慢しようと

藻掻(もが)いていたために身体(からだ)じゅうが又、冷汗でビッショリになってしまったの。

そうすると、もうどこかへ行ったのか知らんと思っていたその男が馬鹿みたいにノロノロした、変テコな胴間声(どうまごえ)で口を利き出したの。

「……どうしても一ツ足りねえと思うんだがナア……みんなは、おらが三人担いだというけんど、おらあ二遍しけあ階子段(はしごだん)を昇らねえんだがなあ……」

その声と言葉付きを聞いた時に、妾は又、髪の毛が一本一本馳け出したように思ったわ。歯の根がガクガク鳴り出して、手足がブルブル動き出すのをどうする

事も出来なかったわ……だってその声っていうのは、ずっと前に一度オブラーコの酒場（レストラン）へ遊びに来て、散々（さんざっ）パラ水兵たちにオモチャにされて外に突き出された、大きな嫌（いや）らしい黒ん坊の声だったんですもの。……その時にその黒ん坊が恨（うら）めしそうな、もの凄い眼付きで妾たちをふり返った顔を、袋の中でハッキリと思い出したんですもの……怖いにも何にも、妾は生きた空がなくなって、もうすこしで気絶しそうになった位よ。今にもゲーッと吐きそうになってね。そうするとその黒ん坊は、

「どうしても無いんだナア……可笑（おか）しいナア……」

って云いながらマッチを擦って煙草を吸い付け吸い付け出て行きそうに歩き出したの。……そん時の嬉しかったこと……妾は思わず手の甲に爪が喰い入る程力を籠めてイーコン様を拝んじゃったわ。

……だけど矢っ張り駄目だったの……階段の方へノロノロと歩いて行った黒ん坊は間もなく奇妙な声を立てながらバッタリと立ち止まったの。

「イヨーッ。あんな処に隠れてら。フヘ、フヒ、フホ、フム……畜生畜生」

と云うなり、ツカツカと近づいて来て、妾の袋へシッカリと抱き付いちゃったの。それと一緒に黄臭い煙草

のにおいと、何ともいえない黒ん坊のアノ甘ったるい体臭（におい）とがムウーと袋の中へ流れ込んで来たようなの。

妾、その時に、どんな風に暴れまわったか、ちっとも記憶（おぼ）えていないのよ。……ただ、ちっとも声を立てなかった事を記憶（おぼ）えているだけよ。誰か加勢に来たら大変と思ってね。……だけどその黒ん坊も、ウンともスンとも云わなかったようよ。おおかた一人で妾をどこかへ担いで行って、どうかしようと思ったのでしょう。暴れまわる妾を何遍も何遍も抱え上げかけては、床の上に取り落し取り落ししたので、そのたんびに妾は気が遠くなりかけたようよ。

だけど、それでも妾は声を立てなかったの。そうしてヤッサモッサやっているうちに、どうした拍子か袋の口が解けて、両足が腰の処までスッポンと外へ脱(ぬ)け出した事がわかったの……。

それに気が付いた時に妾がどんなに勢よく暴れ出したか……アラ又……笑っちゃや嫌(いや)って云うのに……ソレどころじゃなかったわよ、ソン時の妾は……何でもいいから……足が折れても構わないからこの黒ん坊を蹴殺して、その間に袋から脱け出してやろうと思って、頭でも、顔でも、胸でもどこでも構わずに蹴って蹴って蹴飛ばしてやったわ。……ええ……黒ん坊も一生懸

命だったようよ。袋の上からシッカリと組み付いて来て、片っ方の手で妾の両足を押えようとするのだけども、妾の両足を一緒に摑まえる事はなかなか出来ないし、片っ方だけ捉(つか)まえても妾が死に物狂いで蹴飛ばしてやったもんだから、しまいにはセイセイ息を弾(はず)ませて、妾の足と摑み合い摑み合いしながらあっちへ転がり、こっちへ蹴飛ばされしていたようよ。……だけど、そのうちに妾の着物と毛布が両手と一緒に、だんだん上の方へ上って来て、息が出来ない位に切なくなって来ると、黒ん坊はとうとう妾の両足を捉まえて、足首の処を両手でギューと握り締めちゃったの。

そん時に妾は、初めて、大きな声を振り絞ったわ。両手を顔に当てて力一パイ反（そ）りかえりながら、

「助けて助けて助けて。ヤングヤングヤングヤング」ってね。ええ……それあ大きな声だったわよ。咽喉（のど）が破れる位呶鳴（どな）ってやったんですもの。そうして両足を押えられたまま、起き上っては反（そ）りかえり反りかえりして、固い床板の上に頭をブッ付け始めたの。死んだ方がいいと思ってね。

そうしたら黒ん坊もその勢いに驚いて、諦める気になったんでしょう。

「……ウウウウ……そんなに死にてえのかナア……」

って喘(あえ)ぎ喘ぎ云いながら、妾の両足を摑んで、床の上をズルズルと、片隅に引っぱって行くと思ったら、そこに置いてあったらしい細い針金(はりがね)で、足首の処から先にグルグルグルグルと巻き立てて、胸の処まで袋ごしに締め付けてしまったの……。

　その時の苦しさったら、それあ、とてもお話ししたって解かりやしないわよ。だってチョットでも太い息をするか、動くかすると、すぐに長い細い針金が刃物みたいに喰い込んで、そこいら中の肉が切れて落ちそうになるんですもの……それでいて、いくら喘(あえ)いでも喘いでも喘ぎ切れない位息が切れているんですもの……

妾はそのまま直ぐに気が遠くなっちゃった位なの。だけども又すぐに苦しまぎれに息を吹きかえすと、又もや火の付いたように針金が喰い込むでしょう。地獄の責め苦ってほんとうにあの事よ。そうして息も絶え絶えにヒイヒイ云っているうちに今度は本当に気絶してしまったらしいの。

それから何分経ったか、何時間経ったのかわからないけど、又自然と息を吹き返した時には、妾はもう半分死んだようになっていたようよ。手や足の痛さがわからなくなってしまってね。……そうして眼だけを大

きく見開いてどこかを凝視めていたようよ。だからその時に聞いた話も、夢みたように切れ切れにしか記憶えていないの。

「……どうでえ。綺麗な足じゃねえか」

「ウーム。黒人の野郎、こいつをせしめようなんて職過ぎらあ」

「面が歪んだくれえ安いもんだ。ハハン」

「しかし、よっぽど手酷く暴れたんだな。あの好色野郎が、こんなにまで手古摺ったところを見ると……」

「フフン、勿体なくもオブラーコのワーニャさんだかんな」

「ウーム。十九だってえのに惜しいもんだナア……コンナに暴れちゃっちゃ、ヤングだって隠しとく訳に行くめえが……」

「……シーッ……来やがった来やがった……」

って云ううちに、又一人、スパリスパリと煙草を吹かしながら、軽い、気取った足取りで階段を降りて来て、悠（ゆ）っくり悠っくりと妾の傍に近づいた者が居るの……。

その足音を聞くと妾は気もちが一ペンにシャンとなっちゃったわ。飛び上りたい位嬉しくなって……ヤング……って叫ぼうとしたのよ……。

だけど妾が起き上ろうとすると、手や足が、胸の処まで氷みたようになって、動かなくなっていることがわかったの。それと一緒に、声がピッタリと咽喉に閊えてしまって、名前を呼べる位ならまだしも、声を立てる事すら出来なくなっているじゃないの。何だかそんな夢でも見ているように胸の処が固ばってしまってね。もしかすると、あんまり怖い眼に会い続けたので気が変になっていたのかも知れないけど……。

そうするとヤングは、長い長い大きな溜め息を一つしてから、静かな、猫撫で声かと思うくらい優しい口調で、こんなお説教を妾にして聞かせたの。上品な

露西亜（ロシア）語でね……。

「ワーニャさん。温柔（おとな）しくしていて頂戴……。私は貴女（あなた）が憎いから、こんな事をするのじゃありません。よござんすか。よく気を落ち着けて聞いて頂戴……ね。私は貴女が可愛いくて可愛いくてたまらない余りにコンナ事をするのです。私は貴女が、あんまり綺麗で可愛いから、亜米利加（アメリカ）の貴婦人と同じようにして殺してみたくなったのです。ね。いつぞやお話して上げた恋愛ごっこの事を、まだ記憶（おぼ）えていらっしゃるでしょう、ね、ね、わかったでしょう。……私は最早（もう）近いうちに日本と戦争をして戦死をするのです。ですからもう、

貴女以外の女の人と結婚する事は出来ないのです。貴女と一緒に天国に行くよりほかに楽しみは無くなったのです。ですから満足して、私の云う事をきいて頂戴。ね、ね、温柔(おとな)しく私の云う通りになって死んで頂戴。ね、ね……わかったでしょう。ね、ね……」

　そう云ううちにヤングは妾の足に捲かった針金を解き始めたの。そうして胸の上までユックリユックリ解(ほど)いてしまうと、

「サアサア。寒かったでしょうね」

って云いながら、又、もとの通りに袋を冠(かぶ)せて口をシッカリ括(くく)ってしまったの。

ええ……妾はちっとも手向いなぞしなかったわ。死人のようにグッタリとなって、ヤングのする通りになっていたわよ。

その時のヤングの声の静かで悲しかったこと――ほんの一寸（ちょっと）の間（ま）だったけど、妾の胸にシミジミと融（と）け込んで、妾に何もかも忘れさしてしまったのよ。……何だか甘い、なつかしい夢でも見ているような気もちになってね……ネンネコ歌にあやされて眠って行く赤ん坊みたように、涙が止め度なく出て来たもんだから、妾はとうとう声を出してオイオイ泣き出しちゃったの。

「……ヤング……ヤング……」

って云ってね……そうするとヤングは一々丁寧に返事をしいしい妾を袋に入れてしまってから、今一度妾の頭の処を、袋の上から撫でてくれたわ。

「……ね……ね……わかったでしょう、ワーニャさん。温柔しくするんですよ。サアサア。もう泣かないで泣かないで。いいですか。ハイハイ。私がヤングですよ。いいですか。サ……泣かないで泣かないで」

そう云って妾をピッタリと泣き止まして終うと、静かに立ち上って、這入って来た時と同じように気取った足音を立てながら、悠々と階段を昇ってどこかへ行ってしまったの。

だけど妾は、やっぱり夢を見ているような気持ちになって、シャクリ上げシャクリ上げしながらグッタリとなっていたようよ。そうすると、あとに残った三人の男たちは手ん手に妾の頭と、胴と、足を抱えて、上の方へ担ぎ上げながら、黙りこくって階段を昇りはじめたの。そのゆっくりゆっくりした足音が、静かな室の中にゴトーンゴトーンと響くのを聞きながら、妾は何だか、教会の入口を這入って行くような気持ちになっていたようよ。

　だけど第一の階段を昇ってしまうと間もなく、一番先に立って、妾の足を抱えていた男が、変な声でヒョッ

クリと唸(うな)り出したの。そうして何を云うのかと思っていると、

「ウーム。ウメエもんだナア。ヤングの畜生、あの手で引っかけやがるんだナア。どこへ行っても……」

って、サモサモ感心したように云うの。そうすると妾の腰を担いでいた男も真似をするように唸り出したの。

「ウーム。まるで催眠術だな。一ペンで温順(おとな)しくしちまやがった」

そうすると又、妾の頭を担いでいた男が、老人(としより)みたような咳をゴホンゴホンとしながら、こんな事を云っ

たの。
「十七人の娘の中(うち)で、ワーニャさんだけだんべ……天国へ行けるのはナア」
「アーメンか……ハハハハハ」
こんな事を云っているうちに、又二つばかりの階段を昇ると、ザーザーという波の音がして甲板へ出たらしく、袋の外から冷たい風がスースーと這入って来て、擦(す)り剝(む)けた臂(ひじ)の処が急にピリピリ痛み出したの。それと一緒に明るい太陽の光りが袋の目からキラキラとさし込んで来て、眼が眩(くら)むくらいマブシクなったので、妾は両手で顔をシッカリと押えていたようよ。そうし

たら足を抱えていた男が、
「サア……天国へ来た……」
「ウフフフフ。ワーニャさんハイチャイだ。ちっとハア寒かんべえけれど」
「ソレ。ワン……ツー……スリイッ……」
と云ううちに、妾をゆすぶっていた六ツの手が一時(いちどき)に離れると、妾はフワリと宙に浮いたようになったの。
その時に妾は何かしら大きな声を出したようよ。……やっと夢から醒めたようにドキンとしてね……だけど、そう思う間もなく、妾の頭が、船の外側のどこかへ打(ぶ)つかると一処(いっしょ)にガーンとなってしまって、いつ海

の中へ落ち込んだかわからなかったの……。

それから又、妾が気が付いて眼を開(あ)いたのは、一分か二分ぐらい後(のち)のようにしか思えないのよ……何だか知らないけれど身体(からだ)中に痺(しび)れが切れて、腰から下が痒(かゆ)くて痒くてしようがないように思っているうちに、フイッと眼を開(あ)いてみたら、そこは忘れもしないこのレストランの地下室でね。いつぞや肺病で死んだニーナさんが寝かされていたその寝台(ベッド)の上に、湯タンポと襤褸(ぼろ)っ布片(きれ)で包まれながら、素(す)っ裸体(ぱだか)で放り出されているじゃないの。おまけに寝台(ベッド)の横でトロトロ燃えて

いるペーチカの明りでよく見ると、妾の手や足は凍傷で赤ぶくれになっていて、針金の痕が蛇みたいにビクビクと這いまわっている上から、黒茶色の油膏薬がベトベトダラダラ塗りまわしてあるじゃないの。その汚ならしくて気味の悪かったこと……妾何だかわからないままビックリして泣き出しちゃった位よ。

……だけど、それから間もなく料理番の支那人が持って来てくれた魚汁の美味しかったこと……その支那人のチーっていうのに聞いてみたら、その時は妾が死んでからちょうど二日目だったそうよ。……妾の袋は、ルスキー島から二海里ばかりの沖へ投げ込まれる

と間もなく、軍艦と擦れちがったジャンクに拾われたので、その船頭の女房の介抱で息を吹き返したんですってさあ。十七番のナターシャさんも同じジャンクで拾われていたし、パン屋のソニーさんも鯨捕り船だったかに拾われて来たのを、白軍の巡邏船が見付け出して警察に引き渡したんですって。だけど、みんな水をドッサリ飲んでいたんで駄目だったたんですとさあ。そのほかの袋は十日ばかし経ってから、タッタ二個だけ、外海の岸に流れ付いたそうよ。妾怖いから見に行かなかったけど……ホントに可哀そうでしょうがないの……。

妾……この話をするのはあんたが初めてよ。いいえ……誰も知らないの……みんな死んでいるから……。

それあ浦塩（ここ）ではかなり評判になっているらしいのよ。……ええ……あんたが知らないのは無理もないわよ。あんたはまだ浦塩（ここ）に来ていなかったんですからね。おまけに警察でもこの家（うち）でも、まだ秘密にしているから、新聞にも何も書いてないそうよ。おおかた亜米利加（アメリカ）を怖がっているのでしょう。あの軍艦がしたらしい事は、みんな感づいていているんですからね。

ええ……それあ何遍も何遍も訊（き）かれたのよ。一体ど

うしてこんな眼に会わされたのかってね。妾が気が付いてから後(のち)の一週間ばかりというもの、警察の人や、うちの主人や、そのほかにも役人らしいエラそうな人が何人も何人も、毎日のように妾の枕元に遣って来ちゃ、威(おどか)したり、賺(すか)したりしながら、ずいぶん執拗(しつこ)く事情(わけ)を尋ねたのよ。……おしまいには先方(むこう)から色んな事を話して聞かせてね……あのヤングっていう士官はトテモ悪い奴で、今年の夏に浦塩(うらじお)に着いた時に、軍艦の荷物が税関にかからないのをいい事にして、阿片(あへん)をドッサリ浦塩(うらじお)に持ち込んで、方々に売り付けてお金を儲けた事がチャンとわかってるんだ……だけども遣り

方がナカナカ上手でハッキリした証拠が上らないために、どうすることも出来ないでいたんだ。……そうしたらヤングの畜生めスッカリ浦塩（うらじお）の警察を舐（な）めてしまったらしく、今度は配下（てした）の水兵にお金を遣るかどうかして、めいめいの色女を十何人も軍艦に担（かつ）ぎ込んで、上海（シャンハイ）かどこかの市場（ころしば）に売りに行こうとしやがった。……けれども軍艦が沖へ出ると、それが上官に見つかるかどうかしたもんだから、一つ残らず海の中へ放り込ましてしまったのが、やっぱりあのヤングって奴なんだ。……しかもその中で生き残っているのはお前一人なんだからトテモ大切な証人なのだ。俺達は、お前

の仲間十何人の讐（かた）きを取ってやろうと思っているのだから、早く気をシッカリさして返事をしてくれなければ困る。御褒美（ごほうび）の金（かね）はいくらでも遣るから本当の事を云ってくれ……一体お前は何と云ってヤングに欺されたのか。どうして船の中に連れ込まれたのか。そうしてドンナ間違いから海の中に放り込まれるような事になったのか……ナンテいろんなトンチンカンな事を真剣になって訊（き）くの……。

だけど妾どうしても、それに返事する事が出来なかったのよ。……お前さんたちが云っているのはみんな嘘だ。ヤングはそんなに悪い人間じゃない。悪い奴

はあの船の司令官一人だって云ってやろうと思っても、どうしてもその訳を話す事が出来なかったの。……何故っていうと、妾、正気に帰ってからちょうど一週間ばかりというもの、口を利くのが怖くて怖くてしようがなかったんですもの。どうしてもその時の恐ろしさが忘れられなくって「ハイ」とか「イイエ」とかいう短かい返事をするのさえ怖くて怖くてたまらない気がしてね。それを無理に口を利こうとすると、歯の根がガタガタ云い出して、すぐに吐きそうになって来るんですもの……仕方がないから丸で唖者（おし）みたようになって、眼ばかりパチパチさせていたら、警察の人達もと

うとう諦らめてしまって、来なくなったようよ。

……だけども、そうして妾が一人ボッチになってから、ウトウトしようとすると、すぐに、あの時の気持が夢になって見えて来て、寝床の中で汗ビッショリになりながら、一生懸命に藻掻かせられるの。夢うつつに敷布を噛み破ったり湯タンポを蹴り落したりしてね。その恐ろしさったらなかったわよ。そうして、そんな夢のおしまいがけにはキットあのヤングの悲しい、静かな声が、どこからともなくハッキリと聞えて来て、妾をサメザメと泣き出させたの。眼が醒めてから後までも、妾は、そんな言葉の意味を繰り返し繰り返し考

えながら眼をまん丸く見開いて、いつまでも暗い天井を見詰めていたわよ。

そのうちに十日ばかりも経つと、凍傷（しもやけ）の方が思ったよりも軽く済んだし、針金の痕（あと）も切れ切れになってお化粧で隠れる位に薄れて来たの。それにつれて身体（からだ）がもとの通りに元気付くし、口もどうにか利けるようになって来たので、寝ているわけにも行かなくなって、思い切って舞踏場へ出て見たら、間もなく、あんたが遊びに来たでしょう。

それあ不思議といえばホントに不思議でしょうがないのよ。妾はあんたに会ったのが、神様の引き合せと

しか思えないのよ。だって初めてあんたに会ったあの晩ね、あの晩から妾はピッタリと、そんな怖い夢を見なくなったのよ。おまけに前と比べると丸で生れかわったように饒舌娘（おしゃべり）になってしまってね……そうしてそのうちに、あんたがたまらない程可愛いくなって来るにつれて、あのヤングが云っていた色んな言葉の本当の意味が、一つ一つに新しく、シミジミとわかって来たように思うの。そうしてヤングから教（おそ）わった色んな遊びをあんたに教えて見たくてしようがなくなって来たの。それも、当り前の打（ぶ）ったり絞（し）めたりする遊びなんかじゃ我慢出来ないの……一と思いにあんたを殺

すかどうかして終(しま)わなくちゃトテモやり切れないと思うくらい、あんたが可愛いくて可愛いくてたまらなくなったのよ。

……妾、それをやっとの思いで今日まで我慢していたのよ。何故って、万が一にも妾からそんな話を切り出したら、あんたがビックリして逃げ出すかも知れないと思ったからよ。……だけど、それがもう今夜という今夜になったらトテモ我慢がし切れなくなっちゃったのよ。

妾はきょうも、いつものように日暮れ前からこの室に這入(はい)って、お掃除を済まして、ペーチカに火を入れ

たの。そうしてスッカリお化粧を済ましてから、あんたを待ち待ち昨夜（ゆうべ）の飲み残しのお酒を飲んでいたら、そのうちに室（へや）の中が静かアに暗くなってね。向家（むこう）の屋根の雪の斑（まだら）と、その上にギラギラ光っている星だけがハッキリと見えるようになって来たじゃないの……妾もうスッカリあの晩と同じ気もちになってしまってね……たまらなく息苦しくて息苦しくて……。アラ……睡っちゃ嫌（いや）よ。……睡らないで聞いて頂戴ってばさあ……まあ嫌だ。本当に酔っちゃったのね……人が一生懸命に話しているのに……。

……ね……わかったでしょう……あんたにもわかっ

たでしょう。妾のそうした気持ちが……ね……妾、お酒に酔って云っているのじゃないのよ……いいこと……ね。ね。だから妾は今夜こそイヨイヨ本当にあんたを殺そうと思って、ワザワザこの短剣を買って来たのよ。英国出来（でき）の飛び切りっていうのをサア。一寸御覧（ちょっと）なさいってば……このよく斬れること……妾の腕の毛がホラ……ヒイヤリとして……ね。ステキでしょう。いいこと。……この切（き）っ尖（さき）であんたの心臓をヒイヤリと刺しとおして、その血のついた刃先（はさき）を、すぐにズブズブと妾の心臓に突き刺して死んで終（しま）おうと思っているのよ……トテモ気持ちのいい心臓と心臓のキッスよ。

ヤングが教えてくれた世界一の贅沢な……一生に一度っきりの……。

アラッ……妾今やっと思い出したわ。日本の言葉で、こんな遊びの事をシンジュウっていうんでしょう、ね、ね。

……サア。本気で返事して頂戴よ。睡らないでサア。サアってばサア。……いいわ。妾あんたが睡ってたって構わないから……そのまんま突き刺しちゃうから……いいこと……？　ねッ……死んでくれるでしょう。ね……いいこと……殺しても……嬉しい……じゃ……お別れの乾杯よ……ね……そうして寝床へ行くのよ…

……サア……。

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房
1992（平成4）年3月24日第1刷発行
底本の親本：「押絵の奇蹟」春陽堂
1932（昭和7）年12月14日発行
初出：「新青年」
1929（昭和4）年4月号
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
2005年6月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。